ひとりごと

学校生活を終えて、今

「学校」という場所と私の人生は、切っても切り離せない関係にある。私は学校から外面的なことだけでなく、内面的なことも得ることができた。学校生活は私の人生のルーツだ。

私は中学校三年生の時、部活動の部長、学級委員長を務めその上受験勉強などで毎日がとても忙しく悩みを抱えていた。そんな時、私を支えてくれたのは担任の先生やいつもそばにいてくれた仲間だった。誰にも相談できずにいた時、先生や仲間から声をかけてもらいすごく嬉しくて泣きそうになったのを覚えている。私の全てを受け入れてくれるから大丈夫だと思い、自然と言葉が出てきた。自分の話を聞いてくれる人がいてくれたことに幸せを感じ、自分も支えてくれた先生や仲間のように人を助けられるような人になりたいと思ったのを覚えている。

大学生の時には小学校へ教育実習に行った。四週間の実習期間中、一日一日が学ぶことばかりだった。その中で最も印象に残ったことは「子どもたちの力」だ。音楽の授業ではリコーダーの練習が始まったばかりだったので、吹ける子とそうでない子の差が大きく、授業がなかなか進まなかった。時にはマンツーマンで指導していくうちに、どんどん上達していることに気づいた。子どもたちの力は素晴らしかった。その力をどう伸ばすのかが、教師の責務なのだと思った。また教師という職業は人に教えるだけでなく、自分が教える以上に自分自身が学ぶことがある仕事だということを実感した。また自分の学ぶ姿勢があるほど、子どもたちの学ぼうという姿勢が強く表れると感じた。実習を終えた後の満足感や充実感は、今まで体験したことのないくらい大きかった。教育実習で過ごした日々は私の宝物だ。

そして現在。今年度から文部科学省へ研修生として赴任した。教育行政を通じて再び学校に携われること、大変光栄に思っている。これから文部科学省で過ごす時間は多くの時間を占めていく。プライベートも大事だが、仕事の時間をいかに過ごすかもよく考えていきたい。研鑽を積み、自分の可能性を高め良い経験ができるようにしたいと考えている。

（A・Y）